

本県のリンゴ栽培面積は、毎年約2000畝ずつ減少している。野球場のグラウンドがほしい1・3畝なので、150面の野球グラウンドに匹敵する面積のリンゴ園が毎年なくなっている計算になる。

しかし、1988年には、49万トだった生産量は、2015年でも47万トと27年前とほぼ同水準にある。それだけ単位当たりの収量(単収)が増えたことになる。単収増加の立役者は「わい化栽培」普及によるところが大きい。

## 5万トン時代へ 青森リンゴ輸出

22

1988年に最大2万5600畝あったリンゴ園が、2015年には2万8000畝となり、27年間で4800畝も減ってしまった。原因は何といってもリンゴ生産者のリタイアと後継者不足にある。

わい化栽培とは、リンゴの樹の成長を抑える性質を持った台木に、リンゴの苗を接ぎ木して小型にする技術で、リンゴ栽培で大きな革新技術の一つだ。本県には、1958年にイギリスとドイツから導入されたが、一般

# 限られた労力で単収増

に普及したのは、75年前だ。10畝あたり15本程度の樹が植えられている。4倍以上も収穫を上げる人もいる。

本県は、冬季間の積雪による影響を受けないように、大きなリンゴ樹に樹を密植するので、収量が増えて、普通栽培より防除作業が容易になるほか、樹高が低くて整然と並んで植えられているので、収穫や

か、植えてから短期間で収穫が可能になり、太陽光をいっぱい浴びて糖度が上がるなど多くの効果が期待されている。

一方で、苗木・支柱代などの初期投資が大きく、雪害など自然災害に弱いという弱点もある。本県のわい化率は現在23%で、将来(2025年)の目標は28・6%だ。リンゴを栽培している諸外国は全てわい化栽培で収量を上げている。

アメリカやニュージーランドのように簡単に外国人労働者に頼ることもできない中、限られた労力で、本県のリンゴ生産力を維持していくために、わい化栽培への取り組みが欠かせない。

(県りんご輸出協会事務局長 深澤守)

## わい化栽培



岩木山麓にある、わい化栽培のリンゴ園(写真上)と、普通栽培のリンゴ園(写真下)＝いずれも2015年10月(県中南県民局農林水産部提供)